

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 高等学校外国語科における学びがつながることを目指した問いの工夫と振り返りの工夫を通して —

指導主事 濱 寛明

研究協力員 熊本県立鹿本高等学校 教諭 小森田 由紀

1 研究の視点について

(1) 視点1『見方・考え方』に着目した問いの工夫について

① 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」について

平成28年12月21日、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

（以下「平成28年12月答申」とする）の中で、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を以下のように示した。

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること
（下線は筆者による）

また、同答申において、これまで扱われてきた英語の4技能（「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと」・「書くこと」）が、国の領域別の目標において5つの領域（「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと（やりとり）」・「話すこと（発表）」・「書くこと」）として示されることが明示された。

この研究では、「話すこと（発表）」の能力伸長を目指し、単元を中心となる言語活動として「プレゼンテーション」を設定した。プレゼンテーションにおいて、その目的・場面・状況を具体的に設定することで、生徒が「見方・考え方」を働かせて言語活動に取り組むことをねらいとした。また、思考ツールを活用し、プレゼンテーションにおける条件設定を行うことで、生徒がより思考力を働かせることをねらったりする。

② 「聞き手に期待する行動」について

コミュニケーションという言葉については、様々な定義がある。岡部(1993)は、コミュニケーション

の定義を4つの類型にまとめた。その類型の1つである「レトリック（修辞）説」において、以下のよう

コミュニケーションとは、ある特定の状況（場面）のもとで、個人（行為者）がメディア（手段）を選択したうえでシンボルを駆使して（行為）、意図されたある特定の目的を達成するために（目的）する行動である

（下線は筆者による）

ここでの「意図されたある特定の目的」とは、情報の受け手（聞き手または読み手）の存在を前提としたものであり、「情報の送り手が、情報の受け手に想定し期待している、特定の反応や行動」であると捉えた。今回のプレゼンテーションにおいても、生徒が「意図されたある特定の目的」、すなわち「聞き手に期待する行動」を意識することにより、生徒自身の持つ情報や考えを形成、整理、再構築し、「見方・考え方」を働かせることをねらいとした。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

① ルーブリックの活用について

プレゼンテーションにおけるパフォーマンスを評価するため、ルーブリックを活用した。それにより、生徒が一貫した視点を持ちながらプレゼンテーションに取り組み、振り返ることができるようにした。

② 振り返りシートとCAN-DOリストの活用について

振り返りについて、平成28年12月答申では、「主体的な学び」に関する記述の中で以下のように述べられている。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

（下線は筆者による）

この研究では、CAN-DO リスト「話すこと（発表）」を試案として作成し、その項目を振り返りシートに含めることで、生徒が身に付いた技能を自覚できるようにすることをねらいとした。

2 研究の実際

検証 高等学校第2学年4組

単元名 Lesson6 “The Origins of Halloween”

(1) 本単元の授業設計

① 事前の意識調査より

検証授業実施クラスで事前の意識調査を行った。その結果を表1に示す。

表1 意識調査の結果（平成29年9月調査、N=33）

ア. とてもそう思う イ. ややそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない

	アンケート項目（一部抜粋）	ア	イ	ウ	エ
①	私は、英語で発表する時、聞き手が発表の内容について興味・関心があるかどうかを事前に考える。	6.06	39.39	48.98	6.06
②	私は、英語で発表する時、聞き手に発表後どのような反応や行動をしてほしいかを事前に考える。	3.03	24.24	60.61	12.12
③	私は、自信を持って英語での発表ができる。	3.13	21.57	53.13	21.87

（単位：％）

英語で発表する際の聞き手に対する意識の項目（②）及び英語での発表に関する項目（③）について、「とてもそう思う」または「ややそう思う」と回答した生徒の割合はそれぞれ27.27％、24.70％となっている。これらのことから、生徒が「聞き手に期待する行動」への意識を高め、「見方・考え方」を働かせて言語活動に取り組む必要があると考えた。また、自信を持って英語での発表ができるような手だてが必要であることがわかった。

② CAN-DO リスト「話すこと（発表）」の作成

生徒の実態および事前の意識調査の結果を鑑み、鹿本高校で4技能育成に基づき作成されたCAN-DO リスト「話すこと」を参考にしながら、CAN-DO リスト「話すこと（発表）」を作成した。

③ 研究の視点

ア 研究の視点1

- ① プレゼンテーション活動において、「聞き手に期待する行動」に着目させることで、生徒が方向性を持って活動に取り組むことができるようにする。
- ② 単元構成やワークシート、プレゼンテーションの形式・方法等に工夫を施すことにより、生徒が主体的に言語活動に取り組むことができるようにする。

イ 研究の視点2

- ③ 言語活動においてルーブリックを活用することにより、生徒が一貫した視点を持ちながら、相互評価を行い、振り返ることができるようにする。
- ④ CAN-DO リストの項目を含めた振り返りシートを活用し、生徒が自らの変容に気付く、学びを実感できるようにする。

ウ 「学びがつながること」について

単元内で、「英語によるプレゼンテーション」のポイントについて生徒に考えさせる場面を設定する。そのポイントが、英語によるプレゼンテーションだけではなく、英語・日本語を問わず、様々な発表においても活用できることを生徒が気付くようにしていきたい。

④ 単元計画

次	時	学習活動	評価及び研究の視点
一	1	【Part1】 ●本文の内容を理解し、ワークシートを完成する。 ●メキシコのハロウィーンについて話を聞く。	【研究の視点1】 ②海外のハロウィーンについて紹介することで、テーマに対する興味関心の高揚を図る。
	2	【Part2】 ●本文の内容を理解し、ワークシートを完成する。	【研究の視点1】 ②ワークシートを工夫し、生徒が文章を構造化して捉えることができるようにする。
	3	【オリエンテーション】 ●プレゼンテーションを行う際の「聞き手に期待する行動」について考える。 ●授業者が示す2つの例を比較することにより、プレゼンテーションのポイントを学ぶ。	【研究の視点1】 ①「聞き手に期待する行動」について考えることで、生徒がプレゼンテーションにおける工夫の観点に気付くことができるようにする。
二	4	【Part3&4】 ●本文の内容を理解し、ワークシートを完成する。	
	5		
三	6	●プレゼンテーション原稿とスライドを作成する。	【研究の視点1】 ①プレゼンテーションの方法に制限を加えることで、生徒が発表のための工夫について思考を深めることができるようにする。
	7	●プレゼンテーションの練習を行い、改善する。	【研究の視点2】 ③ルーブリックを活用することで、生徒が改善点に気付くための観点を持つことができるようにする。
	8 本時	●ポスターツアー方式によるプレゼンテーションを行う。	【研究の視点2】 ③ルーブリックを活用して相互評価を行うことで、生徒が一貫した視点から評価を行うことができるようにする。 【研究の視点2】 ④振り返りシートを工夫し、生徒が自らの変容に気付くことができるようにする。

(2) 指導の実際（8／8時間）

過程	学習活動及び指導上の留意点
導入	1 本時の流れを確認する。 学習課題（めあて） Introduce a “FUNNY” festival and its origin in the world.（世界の「おもしろい」お祭りとその起源を紹介しよう）
展開	2 ルールを確認する。 ○ポスターツアール方式によりクラス全員が必ず1回はプレゼンテーションを行う 3 プレゼンテーションを行う。 【研究の視点2】 ③ルーブリックを活用して相互評価を行うことで、生徒が一貫した視点から評価を行うことができるようにする。 評価：外国語表現（観察） B基準 英語でのプレゼンテーションにおいて、聞き手に伝わるように話し方や話の構成、スライド等を工夫して行っている。 4 投票 ○投票結果発表後に、1位のグループは全体の前でプレゼンテーションを行う。 5 振り返り（グループ） ○1位のグループのプレゼンテーションや相互評価の結果を基にして、自分たちのプレゼンテーションのねらいが果たせたかについてや、改善すべき点についてグループで話し合う。 ※グループ内での話し合いは、日本語で行う。
整理	6 振り返り（個人） ○振り返りシートを記入し、プレゼンテーション全般や自らの変容について振り返る。 【研究の視点2】 ④振り返りシートを記入させることで、生徒がプレゼンテーションに対する取組全般を振り返り、自らの変容に気付くことができるようにする。

生徒は、6～7時間目にプレゼンテーションの準備を行った。プレゼンテーション原稿作成のためのワークシートは、3時間目に配付しておいた。そのワークシートには、今回のプレゼンテーションで聞き手に期待する行動を書く欄を設けた（図1）。また、3時間目にポイントとして挙げた「スライドの見やすさ」と「発表態度」に「英語の工夫（文章構成・簡潔さ・発音

LESSON7 THE ORIGINS OF HALLOWEEN [プレゼン原稿]

●() グループメンバー ()

CAN-DO リスト [話すこと（発表）]
自分の気に入るものや身近なものなど、原稿を基にして、聞き手に伝わるように発表することができる。

1. 紹介する祭り	
2. 聞き手に期待する行動	
3. 祭りの内容・特徴	
4. 祭りの起源	
5. 一番伝えたいところ	
6. スライド・ポスターシート	
7. スライドの構成	

図1 ワークシートの一部

など)」を項目に加えてルーブリックを作成し、相互評価で使用するEvaluation Sheetを配付した（図2）。事前にEvaluation Sheetを配付

Evaluation Sheet

Group: _____ Presenter: _____

The name of the festival: _____

1. 聞き手に期待する行動	2. 聞き手に期待する行動	3. 聞き手に期待する行動	4. 聞き手に期待する行動
5. 聞き手に期待する行動	6. 聞き手に期待する行動	7. 聞き手に期待する行動	8. 聞き手に期待する行動
9. 聞き手に期待する行動	10. 聞き手に期待する行動	11. 聞き手に期待する行動	12. 聞き手に期待する行動
13. 聞き手に期待する行動	14. 聞き手に期待する行動	15. 聞き手に期待する行動	16. 聞き手に期待する行動
17. 聞き手に期待する行動	18. 聞き手に期待する行動	19. 聞き手に期待する行動	20. 聞き手に期待する行動
21. 聞き手に期待する行動	22. 聞き手に期待する行動	23. 聞き手に期待する行動	24. 聞き手に期待する行動
25. 聞き手に期待する行動	26. 聞き手に期待する行動	27. 聞き手に期待する行動	28. 聞き手に期待する行動
29. 聞き手に期待する行動	30. 聞き手に期待する行動	31. 聞き手に期待する行動	32. 聞き手に期待する行動
33. 聞き手に期待する行動	34. 聞き手に期待する行動	35. 聞き手に期待する行動	36. 聞き手に期待する行動
37. 聞き手に期待する行動	38. 聞き手に期待する行動	39. 聞き手に期待する行動	40. 聞き手に期待する行動
41. 聞き手に期待する行動	42. 聞き手に期待する行動	43. 聞き手に期待する行動	44. 聞き手に期待する行動
45. 聞き手に期待する行動	46. 聞き手に期待する行動	47. 聞き手に期待する行動	48. 聞き手に期待する行動
49. 聞き手に期待する行動	50. 聞き手に期待する行動	51. 聞き手に期待する行動	52. 聞き手に期待する行動
53. 聞き手に期待する行動	54. 聞き手に期待する行動	55. 聞き手に期待する行動	56. 聞き手に期待する行動
57. 聞き手に期待する行動	58. 聞き手に期待する行動	59. 聞き手に期待する行動	60. 聞き手に期待する行動
61. 聞き手に期待する行動	62. 聞き手に期待する行動	63. 聞き手に期待する行動	64. 聞き手に期待する行動
65. 聞き手に期待する行動	66. 聞き手に期待する行動	67. 聞き手に期待する行動	68. 聞き手に期待する行動
69. 聞き手に期待する行動	70. 聞き手に期待する行動	71. 聞き手に期待する行動	72. 聞き手に期待する行動
73. 聞き手に期待する行動	74. 聞き手に期待する行動	75. 聞き手に期待する行動	76. 聞き手に期待する行動
77. 聞き手に期待する行動	78. 聞き手に期待する行動	79. 聞き手に期待する行動	80. 聞き手に期待する行動
81. 聞き手に期待する行動	82. 聞き手に期待する行動	83. 聞き手に期待する行動	84. 聞き手に期待する行動
85. 聞き手に期待する行動	86. 聞き手に期待する行動	87. 聞き手に期待する行動	88. 聞き手に期待する行動
89. 聞き手に期待する行動	90. 聞き手に期待する行動	91. 聞き手に期待する行動	92. 聞き手に期待する行動
93. 聞き手に期待する行動	94. 聞き手に期待する行動	95. 聞き手に期待する行動	96. 聞き手に期待する行動
97. 聞き手に期待する行動	98. 聞き手に期待する行動	99. 聞き手に期待する行動	100. 聞き手に期待する行動

Comments (in English or Japanese) _____ Total: _____

Signature: _____

図2 Evaluation Sheet

したことにより、生徒はその項目を意識しながら原稿やスライドを作成することができた。8時間目のプレゼンテーションでは、クラス全員が英語によるプレゼンテーションを行った。どのグループも、「聞き手に自分たちが紹介するお祭りに興味を持ってほしい。」といった「聞き手に期待する行動」をそれぞれに設定し、聞き手の興味を引く写真を用い、文言を精選したスライドを作成して、プレゼンテーションを行っていた。また、発表内容についても、聞き手が未知で興味を引くような情報を盛り込んでいた。課題としては、原稿を読むことに終始して、聞き手とのアイコンタクトが少ない生徒が半数ほどいたことである。練習時間が十分ではなかったことが原因として考えられる。

(3) 検証結果と考察

① 「豊かな学び」について

表2は、「豊かな学び」に関する変容について調査した質問紙調査の結果である。

表2 「豊かな学び」についての変容（N=34）4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

質問	事前	事後	有意確率
①英語の学習で、相手の話す英語を注意深く聞いて相手の考えを理解しようとしたり、持っている知識などを使って英語で相手に自分の考えを何とか伝えようとしたりしている。	3.21	3.41	*
②英語の学習の時、様々な解決方法を試しながら、問題を解決しようとしている。	2.85	3.09	*
③英語の学習のとき、一人一人ができることを生かしながら、友達や先生と一緒に問題を解決しようとしている。	3.15	3.26	0.14
④英語の学習のとき、「分かるようになった。」「できるようになった。」と感じる。	3.00	3.62	0.13
⑤これまでに学んだことを生かして英語の学習に取り組んでいる。	2.97	3.24	**
⑥英語の学習で学んだことをこれからの学習や生活に生かそうとしている。	3.21	3.26	0.32

ア 研究の視点1からの考察

「外国語によるコミュニケーションにおける見

方・考え方」に関するものとして設定した項目①、②の数値が、事前の数値と比較すると、それぞれ 0.20 ポイント、0.24 ポイント高くなった。「聞き手に期待する行動」からのアプローチ、学習課題の設定の工夫など、本単元でのプレゼンテーション実践に向けての指導の工夫を通して、「見方・考え方」についての生徒の変容が起こったと考えられる。

イ 研究の視点 2 からの考察

成長の実感に関するものとして設定した項目④、⑤、⑥の数値が、事前の数値と比較すると、それぞれ 0.62 ポイント、0.27 ポイント、0.05 ポイント高くなった。ループリックの活用や、CAN-DO リストを含めた振り返りシートの工夫を通して、生徒のメタ認知が高まり、自らの成長についての実感の高まりにつながったと考えられる。

ウ 「学びがつながること」について

生徒の自由記述による振り返りの中で、以下のような記述があった。

- ・今回したことは、将来社会に出てに必要なことだと思います。今回学んだ事を将来につなげていきたいです。
- ・効果的なプレゼンの作り方・話し方を学ぶことができたので、将来、会社などで使えるように覚えておきたい。

本単元で学んだ「プレゼンテーションのポイント」を、汎用的に捉え、学んだ事を将来にもつなげていこうと感じた生徒がいたことが分かる。

② 「未来の創り手」について

表 3 は、「未来の創り手」に関する変容について調査した質問紙調査の結果である。

表 3 「未来の創り手」に関する変容 (N=34) 4 件法

有意確率**<0.01 *<0.05

質問	事前	事後	有意確率
①自分は、学校生活や学習を通して、自分自身が分かるようになった、できるようになったと思う。	2.97	3.21	*
②自分は、学校生活や学習を通して、周りの人が分かるようになっていて、できるようになっていると思う。	3.35	3.47	0.19
③自分は、学校生活や学習を通して、周りの人から分かるようになっていて、できるようになっていると認められていると思う。	2.68	2.91	**
④自分は学校生活や学習を通して学んだことをもとに、自分自身が主体的になったと思う。	2.71	3.06	**
⑤自分は、周りの人が学校生活や学習を通して学んだことをもとに、主体的になったと思う。	3.03	3.18	0.06

表 3 から、「未来の創り手」に関しては、全体的に肯定的な変容が見られた。特に、主体的な姿勢に関する項目④については、表 2 「豊かな学び」の項目①、②、⑤との間に正の相関が見られた。

3 研究のまとめ

(1) 成果

「2 (3) 検証結果と考察」で示したことから、研究の視点による取組により、「豊かな学び」へつながったと考える。この研究では、「プレゼンテーション」に焦点を当て、視点 1、2 それぞれの視点から工夫を行った。特に、「見方・考え方」に着目することにより、学習活動を充実させることができるのではないかと考える。また、言語活動の形態は、「問いの工夫」や「振り返りの工夫」と関連していることや、それらを組み合わせて単元構成を考えることで、授業改善への新たな視点が生まれることを実感した。

(2) 課題

CAN-DO リスト「話すこと (発表)」については、先行研究の要素を含むので、今後さらに研究を深める必要がある。特に、発表における原稿の取り扱い、つまり、「発表の際に原稿を見てよいとするか否か」については、検討の余地がある。「原稿を準備すること」がパフォーマンスにどのような影響をあたえるのか、「話すこと (やりとり)」との関連はあるのか、など、様々な角度から考察していく必要がある。また、ループリック活用についても、作成のプロセスや客観性の向上について更なる研究が必要である。

また、「未来の創り手」に関する資質・能力については、文献研究等を通して「未来の創り手」としての姿を明確に設定することが求められるであろう。

高等学校においては、平成 29 年度に新学習指導要領が告示される予定である。それを指針としながら、生徒の英語運用能力向上に資する授業の在り方について今後も研究を進め、研究テーマに迫っていききたい。

《引用・参考文献》

- ・中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- ・植村勝彦・松本青也・藤井正志「コミュニケーション学入門」(ナカニシヤ)
- ・投野由紀夫「英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック」(大修館書店)